

みんなく映画会

10月13日[日] 13:00-16:20 (12:30開場)

「世界の感触を取り戻せ! — 目の見えない者は、目に見えない物を知っている」

会場: みんなくインテリジェントホール (講堂)

上映作品: 「瞽女 GOZE」 (2019年)

司会: 広瀬浩二郎 (国立民族学博物館 教授)

解説: 萱森直子 (瞽女唄演奏者)、斎藤弘美 (「瞽女ミュージアム高田」 顧問)

定員: 350名 | 参加方法: 事前申込制 (先着順)、要展示観覧券 (一般580円、特別展をご覧になる場合は一般880円)

10月26日[土] 13:00-17:00 (12:30開場)

映像人類学フォーラム

「吟遊詩人をめぐる映像民族誌の視点 — エチオピアとネパールの比較から」

会場: 第7セミナー室

上映作品: 「アズマリ — 声の饗宴 —」 (2023年)、

「カトマンドゥのサーランギ奏者たち」 (2019年)

司会: 川瀬慈 (国立民族学博物館 教授)

解説: 川瀬慈、南真木人 (国立民族学博物館 教授)

定員: 30名 | 参加方法: 事前申込制 (先着順) / 参加無料 (展示をご覧になる方は展示観覧券が必要)

※2本の映像作品を上映し、監督、参加者がともに議論をおこない、制作アプローチについて比較検討します。

11月23日[土・祝] 13:30-15:30 (13:00開場)

「音楽ドキュメンタリー 『The Path ~ パルバティ・バウル 風狂の歌ごえ』」

会場: みんなくインテリジェントホール (講堂)

上映作品: 「The Path ~ パルバティ・バウル 風狂の歌ごえ」 (2019年)

司会: 岡田恵美 (国立民族学博物館 准教授)

解説: 阿部櫻子 (監督)

定員: 350名 | 参加方法: 事前申込制 (先着順)、要展示観覧券 (一般580円、特別展をご覧になる場合は一般880円)

みんなくゼミナール

9月21日[土] 13:30-15:00 (13:00開場)

「世界を異化する歌と語り — エチオピアの吟遊詩人」

会場: みんなくインテリジェントホール (講堂)

講師: 川瀬慈 (国立民族学博物館 教授)

定員: 400名 | 参加方法: 事前申込制 (当日参加申込可) / 参加無料 (展示をご覧になる方は展示観覧券が必要)



最新のイベント情報はこちら

みんなくウィークエンド・サロン — 研究者と話そう

研究者が展示や研究についてお話しします。

会場: 本館展示場 (ナビひろば)

定員: なし (ご自由に参加いただけます)

参加方法: 要展示観覧券 (イベント参加費は不要)

※特別展会場へ入場される場合は、特別展示観覧券が必要となります。

10月6日[日] 14:00-14:45

「^ごぜの「サウンド・スケール」 — 音で知る、音に委ねる、音が生きる」

話者: 広瀬浩二郎 (国立民族学博物館 教授)

月岡祐紀子 (瞽女唄、民謡、三味線弾き語り)

10月20日[日] 14:00-15:00

「ベンガルの遊行詩人 フォキル・ラロン・シャハの宗教世界」

話者: 外川昌彦 (東京外国語大学 教授)

10月27日[日] 14:00-15:00

「モンゴル高原、韻踏む詩人たちの系譜」

話者: 島村一平 (国立民族学博物館 教授)

11月3日[日] 14:00-14:45

「タール沙漠の芸能世界」

話者: 小西公大 (東京学芸大学 准教授)

11月17日[日] 14:00-14:30

「マリ帝国の歴史を伝える語り部の音楽世界」

話者: 鈴木裕之 (国士舘大学 教授)

11月24日[日] 14:00-14:30

「ネパールの旅する楽師」

話者: 南真木人 (国立民族学博物館 教授)

12月1日[日] 14:00-14:45

「越境する韻律の世界」

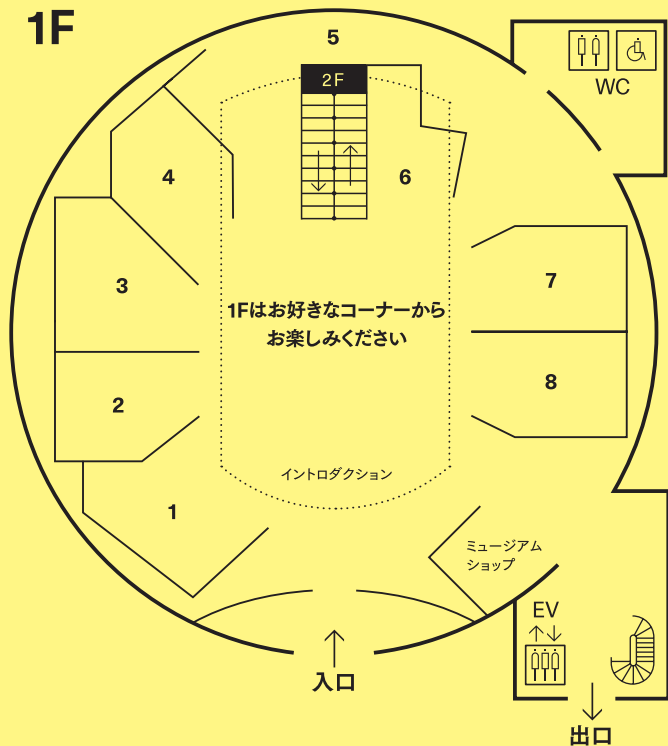
話者: 矢野原佑史 (京都大学 特任研究員)

志人 (しびと) (語り部、ラッパー)

「特別展」

吟遊詩人の世界

1F



1 | エチオピア高原の吟遊詩人

エチオピア高原には、娯楽の場において弦楽器マシニコを奏でながら歌うアズマリ、そして家々の軒先で門付けをおこなうラリベラとよばれる集団が存在する。両集団ともに古より地域社会の人びととの密接な繋がりの中で、芸術を生業としてきた。これに対し、ヴェゲナとよばれる大型の竖琴の奏者は、歌と演奏をとおして、エチオピア北部の代表的な宗教、キリスト教エチオピア正教会の神に祈りを捧げる。

2 | タール沙漠の芸能世界

インド北西部に広がる沙漠エリア(タール沙漠)には、移動民・定住民の枠をこえて多様な芸能集団たちが、パトロン(支援者)たちとの世襲的関係を駆使しながら広大なネットワークを構築

してきた。彼ら、彼女らは、奏で、歌い、踊り、時には語りながら、荒蕪とした沙漠に住む人びとの社会に、呪術・宗教的な力と、森羅万象の意味と、生活の彩りを与えながら、日々の糧を得てきた。本セクションでは、多様な芸能者たちが織りなす世界の一端を覗き見、感じてほしい。

3 | ベンガルの吟遊行者と絵語り

ベンガル地方は、インド東部の西ベンガル州とバングラデシュにまたがる。アジア初のノーベル文学賞を受賞したラービンドラナート・タゴール(ベンガル語ではロビンドロナト・タクール、1861年～1941年)など数多くの詩人が生まれ、柔らかな響きのベンガル語の詩や歌は人びとの日常に息づいている。ここでは、現代を生きるベンガル地方の吟遊

行者パウルと絵語りポトアの歌世界をみていこう。

4 | ネパールの旅する楽師

ガンダルバとよばれる楽師(人口6,971人、2021年国勢調査)は、かつてネパールの村むらを訪ね歩いて擦弦楽器サーランギの弾き語りをするのを生業としてきた。歌うのは、為政者の偉業、事件の叙事伝、ヒンドゥー神話、祝福や吉祥(めでたい)歌、形而上学的(哲学的)歌、民俗歌謡などであった。だが、1970年代以降、彼らの生業は外国人ツーリストに歌を聴かせ、サーランギを売る形に徐々に変わってきた。今日、サーランギの音色は国民文化となり、彼らは外国人との接点により世界を旅する楽師になった。

5 | 瞽女

見えない世界からのメッセージ
盲目の旅芸人・瞽女は、室町時代の史料に登場する。江戸時代には瞽女の集団が全国に分布していた。中世の瞽女は鼓に合わせて「曾我物語」を語っていたが、江戸時代以降は伴奏楽器として三味線もちいるようになる。瞽女は娯楽の少ない農村に多様な唄を届けるエンターテイナーであり、治療師、カウンセラーとしても活躍した。近代化に伴い瞽女の数も減少し、2005年には「最後の瞽女」と称される小林ハルが亡くなった。本セクションでは「見えない世界」をキーワードとし、瞽女の役割、瞽女文化の今日的意義を紹介する。

6 | うたが生まれる心の小道

このコーナーでは、現代日本の語り部/ラッパーである志人(しびと)に焦点をあて、彼の詩や楽曲がどのように生まれ、世に出ていくのかを紹介する。彼は、詩的表現と音楽性の双方において、日本古来の韻律史を現

在進行形で更新しつつ、「なつかしい未来」なるタイムレスな表現を試みる。ここで、現代日本が生んだ孤高の詩人の心のなかを垣間みてもらい、韻律という人類の営為を各々の胸中にて解きほぐしてもらいたい。この“小道”を歩いて外へ出た時、あなたの心がそれぞれの“詩作”へと向かっていますように。

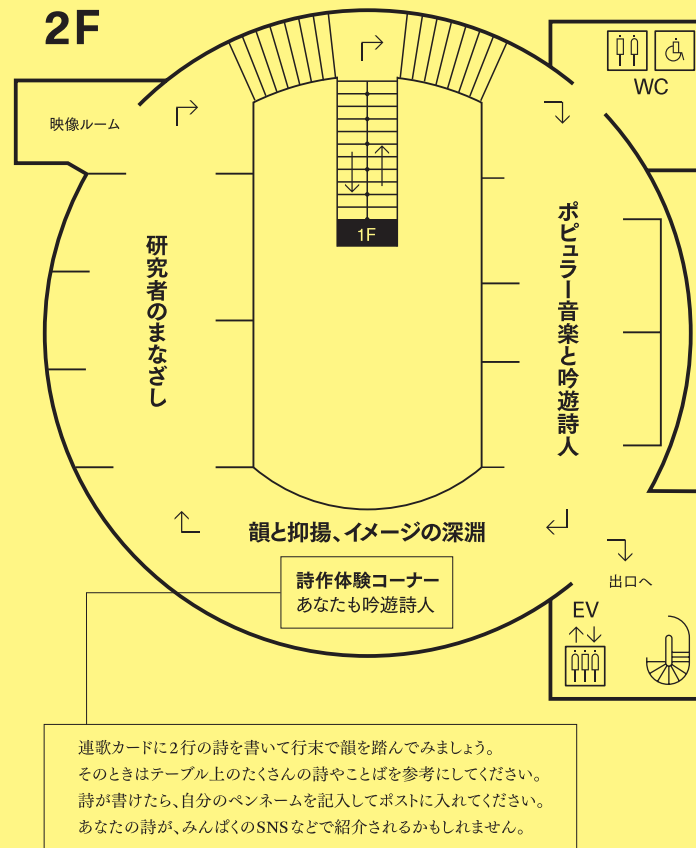
7 | モンゴル高原、
韻踏む詩人たちの系譜

モンゴル高原の遊牧民たちのあいだは、口承文芸が高度な発達を遂げてきた。遊牧の民は移動生活をおこなう。そのため文学的な創作は紙に書くのではなく、物語を口で語るという方法が取られる。そのような口承文芸における長い物語の創造と暗記を可能としたのが、「韻踏み」という技術だった。韻を踏みながら物語を歌い語るシャーマン、そして吟遊詩人トーチ。彼ら、彼女らの系譜は、現代のヒップホップのラッパーへと継承されている。

8 | マリ帝国の歴史を伝える語り部

13世紀、西アフリカに誕生したマリ帝国。サハラ交易で栄え、その首都は黄金の都と讃えられた。その建国を物語る「スンジャタ叙事詩」を伝承してきたのが語り部「グリオ」。英雄スンジャタ・ケイタ、宿敵スマオロ・カンテをはじめ、各氏族の始祖が活躍する物語をグリオが歌いあげる。マリ帝国の末裔であるマンデの民はその歌声に心震わせながら、マンデとしての矜持を鼓舞される。歌と語り紡ぎだす絢爛豪華な歴史の世界へ、ようこそ。

2F



連歌カードに2行の詩を書いて行末で韻を踏んでみましょう。そのときはテーブル上のたくさんの詩やことばを参考にしてください。詩が書けたら、自分のペンネームを記入してポストに入れてください。あなたの詩が、みんなのSNSなどで紹介されるかもしれません。

ポピュラー音楽と吟遊詩人

吟遊詩人は時代の変遷の中、様々な役割を担うとともに、その多くは地域社会において、時には畏怖の対象とされ、また時には社会の周縁に追いやられてきた。近年は、ポピュラー音楽界、グローバルな消費社会、さらには無形文化遺産保護運動との繋がりのなかで、その芸能の様式や、自身の表象のありかたを柔軟に変化させている。

韻と抑揚、イメージの深淵

吟遊詩人は、詩を歌い語り、特定のメッセージを伝達するだけではない。韻、すなわち同一、あるいは類似した

音を、歌詞の特定の場に繰り返し使い、抑揚を生みだす。さらには修辭的なトリックによって、聴き手のなかにある特定のイメージを喚起させていく。これらは、吟遊詩人の歌や語りを成立させる極めて重要な要素なのである。

研究者のまなざし

研究者は対象の人びとを観察する側であると同時に、人びとに観察される側でもある。調査研究とは人と人の繋がりのなかで生まれる営みにほかならない。我々はどうのようなアプローチで吟遊詩人と関わり、また逆にこれらの存在からまなざしを投げかけられてきたのだろうか。